中辺分別論の諸問題

――相品・障品・真実品を中心として――

舟橋尚哉

はじめに

中辺分別論（Madhyāntavibhāga-bhāṣya）は初期唯識思想を伝えている重要な論書の一つである。[1]偈頌は弥勒（Maitreya）に帰せられており、世親（Vasubandhu）がそれに註釈したものを、一般に中[2]辺分別論（又は弁中辺論）といっている。中辺分別論頌はシナ伝及びチベット伝ともに弥勒の五部論の一つに数えられている。すなわち、弥[3]勒の五部論としてシナ伝では一般に、

一、瑜伽論
二、分別瑜伽論（引用のみで現存せず）
三、大乗荘厳経論頌
四、弁中辺論頌（中辺分別論頌）
五、金剛般若論頌

があげられ、チベット伝では、

一、大乗荘厳経論頌
二、中辺分別論頌
三、法法性分別論
四、現観荘厳論頌
五、究竟一乗宝性論頌

があげられている。それ故、シナ伝・チベット伝ともに、この中辺分別論頌の著者を弥勒としている。しかし弥[4]勒が実在の人物であったかどうかについては、まだ問題があるように思われる。

中辺分別論についての研究は、山口益博士が「Madhyāntavibhāgaṭīkā (Sthiramati, 1934)」「中辺分別論釈疏（昭和十年）」のいわゆる中辺分別論安慧釈、及び「漢蔵対照弁中辺論（昭和十二年）」の三冊の書を出されて以来、急速に進んだが、最近、世親釈の梵本が発見され、長尾博士[5]やDr. Tatia[6]などによって出版され、またR.C. Pandeya[7]によって安慧釈の梵本も出版されたので、中辺分別論研究[8]が再燃した感がある。

私はこの小論において、中辺分別論の相品・障品・真実品の三品を中心に、中辺分別論の思想、及びそれらの思想が他の唯識論書ではどのように扱われているかを考察しながら、初期唯識思想を探ぐってみようと思う。

一

中辺分別論において、もっともよく知られた有名な偈頌は、虚妄分別の有無相を説く次の如き偈文であろう。

「虚妄分別[9]は有り、そこに二つのもの有るにあらず、
されど空性はここに有り、そこにしかも彼有り」（相品第一偈）

「虚妄分別は有り」とは私達の現実の世界である。すなわち、「これは私である」「これは私のものである」という「我執」「我所執」の連続の世界である。いいかえれば、私達は「能取（grāhaka）」と「所取（grāhya）」の相対の世界に生きている。しかしそのすぐ後で、「ここに二つのもの有るにあらず、されど空性はここに有り」というのは、「所取[10]」「能取」として顕現するけれども、我執し法執せられたるその顕現相は実として有自性ではないのであるから（＝虚妄であるから）、従ってそこには二（能所）はなく、ただ空性のみがあるのである。しかも「此[11]〔空性〕の上にしかも彼〔虚妄分別〕有り」というのは、此の空性中に、彼の所取能取として顕現する虚妄分別があるということで、この虚妄分別と空性との関係は、法法性分別論[12]の「法と法性」との関係にもよく顕われている。

またこの偈文は、虚妄分別そのもの（識＝心）（依他起性）の上に虚妄に分別すること（遍計所執性）と、所取能取の二なき空性を観る（円成実性）という、いわゆる唯識三性説を語るものであり、また唯心無境説を語るものともいわれている。なぜなら、「所[13]取能取の二である虚妄なる遍計所執性（外境）は無であるが、依他起性である虚妄分別（心）は有り」といわれるからである。

すなわち、瑜伽行派にとって唯識である虚妄分別の識は、所取能取という相対的な遍計所執性の姿で把握される

如くには存在しないけれども、所[14]取能取という遍計所執性の姿で把握されない存在として、すなわち、真実には所取能取を否定した空性の自体として存在するものであって、ここに瑜伽行派は中観学派と全く立場を異にする。なぜなら中観学派は識自体を否定しようとするが、瑜伽行派は識における所取能取の遍計所執性を否定して、識を、所取能取の遍計執を否定した本来の空なる無分別不可言の姿において、肯定的に眺めようとするからである。

二

中辺分別論は、その論名が示す如く、「中[15]と辺とを弁別する（Madhya-anta-vibhāga）論」である。そして「中」とは中道であり、「辺」とは辺際、すなわち二辺のことである。中阿含巻五十六（羅摩経）に、

「五比丘当レ知。有二二辺行一。諸為道者所レ不レ当レ学。一曰著二欲楽下賤業凡人所行一。二曰自煩自苦非賢聖求法無義相応。五比丘。捨二此二辺一有レ取二中道一。成レ明成レ智　成二就於定一　而得二自在一。趣レ智　趣レ覚　趣二於涅槃一。謂八正道。正見乃至正定。是謂為レ八」（大正一、七七七下）

とあり、原始仏教でいう中道とは、一般には欲楽と苦行との二辺を離れた、いわゆる八正道のことである。

さて中辺分別論では、

「それ故に、一切〔法〕[17]は空にあらず、不空にもあらずと説かれる。[18]

有なる故に、無なる故に、また有なる故に中道である」（相品第二偈）

といって、中道（madhyamā-pratipad）を説いている。これに対する中辺分別論安慧釈では、宝積経の経文を引いて、

「迦葉よ、有というは是れ一辺なり。無というは是れ第二辺なり。迦葉よ、此二辺の中はこれ諸法を如実に観察することある中道と称せられる」

と述べている。

宝積経迦葉品では、Staël-Holstein[19] 本の梵文八二頁から九四頁に至るまで十回余の madhyamā-pratipad（中道）が説かれているが、その内、この中辺分別論安慧釈が引用している宝積経は九〇頁に説かれている。

astīti kāśyapa ayam eko 'ntaḥ
nāstīty ayaṃ dvitīyo 'ntaḥ
yad etayor dvayor antayor madhyam iyam ucyate
kāśyapa madhyamā pratipad dharmāṇāṃ bhūta-
pratyaveksāt

[24]これに相当する仏説摩訶衍宝蔵経（晉訳）では、

「有者是一辺。無者為二辺。此二中間。無所有亦不可得。是謂中道真実観法」（大正一二、一九六中）

となっている。

ところで「一切〔法〕は空にあらず、不空にもあらず」とはどういう意味であろうか。まず「空にあらず」とは、空性と虚妄分別があるからであり、「不空にあらず」とは、所取と能取との二がないことによってであるといわれる。ここでいう[25]一切〔法〕とは虚妄分別といわれる有為法と、空性といわれる無為法のことである。これら一切法が「空にあらず」といって無を離れ、「不空にもあらず」といって有を離れ、まさしく有無を離れた中道を語らんとしている。

次に「有なる故に、無なる故に、また有なる故に中道である」といわれているが、最初の「有なる故に」とは「虚妄分別の有なる故に」であり、「無なる故に」とは「所取能取の無なる故に」である。後者の「有なる故に」とは、「虚妄分別中に空があり」「空性中に虚妄分別がある」から、「有なる故に」といわれるのであり、これは有無を離れた中道[26]といわれる。

三

さて、相品第三偈は虚妄分別の自相（svalakṣaṇa）を説く偈であるが、とりわけ「識と境」との関係を的確に述べている重要な偈である。

「[27]外境（artha）と有情（sattva）と我（ātman）と表識（vijñapti）として顕現する識が生ずる。

されど〔実には〕その境はなし。彼（境）なき故に、彼（識）もまたなし」（相品第三偈）

ここでいう「[28]外境としての顕現」とは色等の体として顕現するものであり、[29]色声香味触法の体として顕現する六境のことである。「[30]有情としての顕現」とは五根性として自他の相続において〔[31]顕現するものである〕。「[32]我としての顕現」とは染汚の意（kliṣṭam manaḥ）、すなわち[33]我癡、我見、我愛、我慢と相応するものであり、「[34]表識としての顕現」とは六識のことである。而して有情と外境と表識との顕現とは、五根、六境、六識、つまり根、境、識の顕現のことに他ならない。

次に「[35]されど〔実には〕その境はなし」というのは、外境と有情として顕現するものの行相なき故に境はないのであり、また我と表識として顕現するものの、非真の顕現な

る故に境はないといわれている。

そして「彼（境）なき故に、彼（識）もまたなし」というのは、かの所取、すなわち色等と五根と意と六識と呼ばれる四種であって、これらの所取の境なきにより、かの能取なる識もまたなしと説かれている。ここで注意すべきことは、長尾博士[33]も指摘されている如く、所取、能取ということが、二重、三重に説かれていることである。まず外境と有情と我と表識の四つが所取であり、それに対応する能取は識（能阿頼耶）である。次に安慧釈によれば、「所取無[35]きに我と表識としての二の顕現は能取の行相として顕現する故に非真の顕現なり」とあるから、この場合の所取は外境と有情であり、能取は我と表識である。このように所取、能取は客観と主観ということであるから、種々の位態で語られていることが知られる。

ところでこの「境なき故に識もなし」という説き方は入無相方便相を説く相品第六偈（c—d）の次の如き偈文とも関連している。

「〔識の〕取得に依りて〔境の〕無所得生ず。（a—b）
〔境の〕無所得に依りて〔識の〕無所得生ず。（c—d）」

私はこの偈文の上に初期唯識思想の特徴を見ることができると思う。なぜなら、前半の偈は「唯識と取得することに依つて、境の無所得生ず」といって、唯識無境を強調しているが、そのすぐ後で「境の無所得に依つて、唯識の無所得生ず」といっていることは、この唯識無境の〔唯〕識も無自性なることを説いているものであり、ここに初期唯識思想が般若空思想より展開したものであることが知られるのである。

このような説き方は法法性分別論にも見られ、

「唯記識（vijñapti-mātra）の取得により、一切の境の無所得を悟り、一切の境の無所得により、唯記識もまた無所得なりと悟る」

とあり、世親釈には

「唯記識と得知するによりて一切の実境の不得知に入る。記識こそ実境（artha）として顕現するにより、外境は無なるを以ての故に。一切境の不得知より唯記識の不得知に悟入する」

とある。

さて、相品第四偈の世親釈には、玄奘訳に「乱識」とあるが、ここの真諦訳では実に九回も「乱識」という語が用いられている。しかし、それに相当するサンスクリットはbhrānti-mātra（乱のみ）であり、チベット訳もḥkhrul

pa tsam（錯乱のみ）となっている。従って、サンスクリット及びチベット訳から見る限りここでは単に「錯乱のみ（又は唯乱）として生起する」という意味であると思われる。

四

さて、唯識思想における空性の特色を説いているのは、相品第十三偈である。

「[41]二の無と無の有とは空性の相である。
有にも非ず、無にも非ず、一異の相に非ず」（相品第十三偈）

ここでいう「二の無」とは、所取[42]と能取との二の無であり、「無の有」とは二の無の有なること、すなわち空性[43]が無の自性の相を有することである。「有にも非ず」とは、所取能取の二の無であるからであり、「無にも非ず」とは、二の無の有であるからであるといわれる。

長尾博士が「空性を定義して『二つの無』だけでなく、『無の有』を付加することが、本論の特色である」[44]といわれているように、一切は無自性空であるという中観派に対して、まさしく「無の有」を説くところに、瑜伽唯識の特色があると思われる。

この「二の無」と「無の有」の記述は、中辺分別論相品第二十偈にもあり、

「[45]人と法との無がここにおける空性である。
それの無の有が、それは彼より余の空性である」

と説かれている。

次に「一異の相に非ず」とは、虚妄分別と空性とが法[46]と法性との如く、無常[47]性や苦性のように、一でもなく、異でもないということで、異であるときには「法[48]性は法より異であるが、それは理に応じない」といわれ、「もし[49]一なるときには清浄の所縁として〔はたらく〕智は〔必要〕なくなるであろう」といって、一異の相でないことを説いている。

さて、山口博士はサンスクリットの欠けているところを、チベット訳より還元梵語で補っておられ、今度発見されたサンスクリット本と対照するとき、大部分一致していることに驚かされるのであるが、ただ相品第二十二偈に関しては、長尾博士も指摘しておられるように、当時、完全なサンスクリット本がなかったため仕方がないともいえるが、新しいサンスクリット本発見によって、山口博士の推定と異なった結果となったようである。すなわち、山口博士は中辺分別論の釈疏の中で、

「[53]結局、梵蔵本は何れも第二十二偈前半行丈で終り、漢訳の有する後半行は偈として存せないことを示す。云々」

といっておられるが、今度発見された梵本には、[54]いずれも第二十二偈は完全に存在しており、漢訳だけが第二十二偈後半を有するものでないことが明らかになったのである。

五

次に障品では声聞の障である煩悩障と、菩薩の障である所知障とが説かれる。すなわち、菩薩にとっては、煩悩障と所知障とが障となるから、㈠[55]具分障（玄奘訳）といわれる。しかし真諦訳では[56]徧障とあり、サンスクリットやチベット訳も遍満（vyāpi）という語になっている。㈡一分障というのは声聞等の障であるところの煩悩障のことである。㈢増盛障というのは声聞等と菩薩に力強く相続して起る貪等の行であるといわれる。

ところで、ここの玄奘訳に「彼ノ貪等ノ行」とあるが、サンスクリット及びチベット訳ともに[57]teṣām という複数の属格が使われているから、この「彼」は声聞等と諸菩薩を指すものと思われる。ちなみに真諦訳を見ると「前諸人」となっている。それからチベット訳北京版によれば、増盛に相当する語が[58]lhag ma（残余）となっているが、これは lhag pa（増上、増盛）の誤まりかと思われる。なぜなら、これに相当するサンスクリットは udriktaṁ（増上、増盛）であり、玄奘訳も「増盛」となっているからである。

次に㈣平等障とは、玄奘訳に「[59]彼ノ等分ノ行」とあり、この「彼」は一見、声聞等と菩薩を指すようでもあるが、サンスクリット及びチベット訳には、「彼」に相当する語はなく、[60]sama-bhāga-caritānām（等分の行の〔障〕である）となっている。従ってこの「彼」はむしろ直前の貪等を指すものではなかろうか。この「[61]等分行」はよく「薄塵行」とともに説かれるようである。例えば大乗阿毘達磨雑集論巻十三には

「[62]貪行瞋行癡行慢行尋思行等分行薄塵行」（大正三一、七五三上）

とあり、瑜伽論巻二十九にも

「其等分行及薄塵行補特伽羅」（大正三〇、四四六上）

とか、

「如二等分行補特伽羅一。薄塵行者当レ知亦爾」（大正三〇、四四六上）

とある。この他、顕揚聖教論巻第三でも

「一[15]軟根。……。第二利根。……。三貪行。……。第四瞋行。……。第五癡行。……。六等分行。……。七薄塵行」（大正三一、四九四中）

と説かれている。

また「等分行」が「平等」と共に用いられることについては、瑜伽論巻二十六に

「若得平等補特伽羅名二等分行者一」（大正三〇、四二五下）

とあり、瑜伽論巻五十九では、

「平等随眠者。謂等分行所有随眠」（大正三〇、六二七中）

となっている。次の㈤取捨障とは、生死を取捨する障のことであり、菩薩種姓の無住処涅槃における障であるといわれる。これらの五障は声聞等と菩薩との障であるといわれ、煩[14]悩障と所知障との二障に関連して説かれている。

次に九種の煩悩の相を説く中、最後の慳結は「遠離（玄奘訳）を遍知する を障う」といわれているが、「遠離」に相当する語が真諦訳では「軽財」となっている。Sk. saṁlekha（Tib. yo byad bsñuṅs pa）は Mvy. 7012 に「什器を減少すること」とあり、Monier-Williams には strict abstinence（厳しい禁欲）とある。この障は「資生の具（pariṣkāra 財物）に貪著する」とあるから、遠[16]離とは strict abstinence であり、従って財物（資生の具）より当然遠離していなくてはならないのである。

「善等の十に対する障」以下は菩薩の障である。すなわち、障品第九偈（玄奘訳）には、

「善[17]菩提摂受
有慧無二乱障一
廻向不二怖慳一
自在名二善等一」

とあり、その直後に「如レ是善等十各有二前三障一」（障品第十偈前半）とあるように、善にも、菩提にも、それぞれ三つずつの障が説かれる。ところで「善[17]法障復十」（真諦訳）の偈文であるが、サンスクリットには、

śubhâdau daśadhā 'paraṁ ‖ II (3. d)

とあり、チベット訳もこれと一致していて、障品第三偈 d に相当している。しかし玄奘訳ではこの偈文は見あたらない。

六

真実品では十真実が説かれるが、その根本となるものは、第一の根本真実である。では根本真実とは何か。

「[68]三種の自性は㈠常に無なり、㈡有なれども真実ならず、㈢有無の真実なるものであると、三自性は許される」（真実品第三偈）

ここに根本真実とは、三自性すなわち遍計、依他、円成の三性の真実であると説かれている。なぜなら、㈠遍計[70]所執相は常に無であるという、これは遍計所執性における真実である。それは無顚倒なる故に。㈡依他起相は有なれども真実ならず、乱性の故にといわれ、㈢円成実相の真実は有と無とに於いて真実であるといわれる。有とは所取能取の二無の有であり、無とは二無き体である。ここで想い起されるのは、相品第十三偈の

「[71]二の無と無の有とは空性の相である」

という偈文である。ここでは円成実の真実を、そして先には空性の相を説いているが、いずれにしても、「二の無」のみならず、「無の有」を説くところに唯識思想の特色があると考えられる。

相真実以下の九真実は、いずれも根本真実である三性の真実と関連している。すなわち、相真実は「法と補特伽羅」とに増益（samāropa）と損減（apavāda）の見があり、その見が生起しないとき、遍計所執の真実相といわれ、依他起の真実とは、「所取と能取」とに増益と損減の見があり、その見が生起しないとき、依他起の真実相といわれる。「有と無（非有）」とにも増益と損減の見があり、その見が生起しないとき、円成実の真実相といわれるのである。

第五の麁細真実とは「麁[72]の真実は世俗諦であり、細真実は勝義諦である」。世俗諦は三種あり、㈠仮の世俗と、㈡行（pratipatti）の世俗と、㈢顕了の世俗であるといわれ、これらは遍計、依他、円成の真実に、それぞれ相当している。勝義諦にも三種あり、㈠義（artha）の勝義と、㈡得の勝義と、㈢正行（pratipatti）の勝義で、これらは円成実性に相当する。

ここで注意すべきことは、「行の世俗」の「行」は pratipatti[73] であり、チベット訳は ṣes pa[74] となっている。しかるに、「正行の勝義」の「正行」に相当するサンスクリットは Nagao[75] 本、Pandeya[76] 本、Tatia[77] 本ともに prapattyā (Inst.) であるのに、山口[78]本のみ prayatyā となっている。しかしそのすぐ後の注釈では、いずれも pratipatti となっているから、やはり偈文も pratipatti の意であると考えられる。（偈文であるから prapatti となったものと思う。）

ただチベット訳は、行の世俗の「行」は ṣes pa であるのに、「正行」に相当するチベット訳は sgrub pa となっ

ている。それ故、サンスクリットはいずれもpratipattiを用いているが、チベット訳及び漢訳は、わざわざ訳語を変えて意味を明瞭ならしめたものと考えられる。

七

次に第八摂真実では、相、名、分別、真如、正智が根本の三真実（遍計、依他、円成の真実）に摂在することを説いている。相、名、分別、真如、正智は五法（pañca-dharma）又は五事（pañca-vastu）といわれ、この五法[29]と三性との関係は論書によって差異がある。いま、中辺分別論では、真実品第十三偈（玄奘訳）に、

「名[30]徧計所執
相分別依他
真如及正智
円成実所摂」（大正三一、四六九下）

とあるように、名は遍計、相と分別は依他、真如と正智は円成実に相当している。そしてサンスクリットでも世親釈の部分には、

「相[31]と分別は依他起に摂せられる。名は遍計に〔摂せられる〕」

とあるから、これは中辺分別論の説であると考えられる。

さて、楞伽経[32]では相、名（又は名、相）が遍計に、分別が依他に、正智、真如が円成実に相当している。従って中辺分別論と楞伽経とを比較した場合、相（nimitta）を依他とする中辺分別論と、相を遍計とする楞伽経との相違が見られる。

ところが、いま、中辺分別論と楞伽経の偈文の上だけで比較してみると、両者の間には全く相異がないことに驚かされるのである。すなわち、中辺分別論、真実品第十三偈には、

nimittasya[33] vikalpasya nāmnaś ca dvaya-saṅgrahaḥ |
samyagjñāna-satatvasya ekenâiva ca saṅgrahaḥ ||
（Tatia 本：satattvasya） III (13)

「相と分別と名は二〔性〕に摂せられる。
正智と真如（真実）は一〔性〕に摂せられる」

とあり、楞伽経でも、

nāma-nimitta-saṁkalpāḥ[34] svabhāvadvayalakṣaṇam |
samyagjñānaṁ tathātvam ca pariniṣpannalakṣaṇam
||6||

「名と相と分別とは二〔遍計と依他〕の自性の相である。
正智と真如とは円成の相である」（剎那品第六偈）

とあり、両者の説には何等異なるところがない。（偈文の上で相、名、分別の順序や、分別と真如のサンスクリットなど、多少異なってはいるが）。勿論、楞伽経には、

「名[36]と相とは遍計所執性として知らるべきである云々」

の記述があり、中辺分別論の所説と異なっているが、偈文の上では所説として何ら異なるところがない。しかも楞伽経のこの偈文は、楞伽経三万六千一切法集品第百三十四偈にも出ており、

nimittaṃ nāma saṃkalpaḥ svabhāvadvaya-[36]
lakṣaṇaṃ |
saṃyagjñānaṃ hi tathatā pariniṣpannalakṣaṇam
‖134‖

とあり、また偈頌[37]品の百五十六偈とも一致している。

こう考えてくると、この偈文は中辺分別論の偈頌か、楞伽経の偈頌か、いずれが先に成立したか明確でないが、（あるいは、かなり古くから伝承されていたのかもしれないが）、全く同じ思想を語るものであり、この偈頌の解釈の相異が中辺分別論と楞伽経との、五法と三性との相摂関係の相異となったに過ぎない。いずれにしても、中辺分別論と楞伽経との偈頌が一致することは、初期唯識思想の成立を考察する上に、まことに注意すべきことであると思う。

八

第九差別真実には七種の真実がある。

一、流転真実（pravṛtti-tattvaṁ）[38]
二、〔実〕相真実（lakṣaṇa-tattvaṁ）
三、唯識真実（vijñapti-tattvaṁ）
四、安立真実（sannivesa-tattvaṁ）
五、邪行真実（mithyāpratipatti-tattvaṁ）
六、清浄真実（viśuddhi-tattvaṁ）
七、正行真実（samyakpratipatti-tattvaṁ）

ところで、この七種真実は世[39]親釈及び安[40]慧釈が示す如く、解深密経に七種真如として説かれている。すなわち、解深密経分別瑜伽品第六には、

「此復七種。一者流転真如。謂一切行無[41]先後性。二者相真如。謂一切法補特伽羅。無我性及法無我性。三者了別真如。謂一切行唯是識性。四者安立真如。謂我所説諸苦聖諦。五者邪行真如。謂我所説諸集聖諦。六者清浄真如。謂我所説諸滅聖諦。七者正行真如。謂我所説諸道聖諦」（大正一六、六九九下）

とあり、真実（tattvaṁ）が真如（tathatā）となっている。

さて、七種真実の内、第五の邪行真実であるが、偈文では kupannatā（悪行）とあるのに、世親の注釈では mithyā-pratipatti（邪行）となっている。従ってチベット訳も偈文では ñan par shugs（悪行）とあり、世親の注釈では log par sgrub pa（邪行）となっている。mithyā-pratipatti の方が一般的であるから kupannatā とあるのは、やはり偈文の韻の関係であろうか。

また大乘荘厳経論功徳品第二十二にも、七種真如が説かれている。

「諦建立は七種である。真如に依止してであつて、即ち一、流転真如（pravṛtti-tathatā）。二、実相真如（lakṣaṇa-tathatā）。三、唯識真如（vijñapti-tathatā）。四、安住真如（saṁniveśa-tathatā）。五、邪行真如（mithyāpratipatti-tathatā）。六、清浄真如（Sk. 欠）七、正行真如（saṁyakpratipatti-tathatā）に依止してである。」

ところが大乘荘厳経論の梵本（Lévi 本）では、清浄真如のみを欠いている。しかしチベット訳を対照してみると、明らかに邪行真如の後に rnam par dag paḥi de bshin（viśuddhi-tathatā 清浄真如）という語が入っており、漢訳でも、

「七種差別即是七如。一輪転如。二空相如。三唯識如。四依止如。五邪行如。六清浄如。七正行如」（大正三一、六五三上）

とあるから、やはりサンスクリットにも邪行真如と正行真如との間に、清浄真如があったものと思われる。

ところで中辺分別論では、サンスクリット、チベット訳、漢訳とも

「流転と安立と邪行とは二（遍計と依他）であり、相と唯識と清浄と正行とは一（円成）による」（真実品第十四偈）

とあるが、大乘荘厳経論では、七種真如についてはサンスクリット、チベット訳、漢訳とも説いているが、七種真如と三性との関係を説いているのは、漢訳のみである。すなわち、

「如此七種如名諦仮建立。此中応知三種如是分別依他二性。謂輪転如依止如邪行如。四種如是真実性。謂空相如唯識如清浄如正行如」（大正三一、六五三上―中）

とある。この七種真如は山口博士も指摘されている如く、瑜伽論巻七十七や三無性論、十八空論などにも説かれている。

ま　と　め

中辺分別論の研究に関しては、山口博士が安慧釈の梵本、及びその和訳や、「漢蔵対照弁中辺論」（昭和十二年）などを出版されて以来、数多の研究論文が発表されたが、私は最近 Nagao : Madhyāntavibhāga-bhāṣya (Tokyo, 1964) の他に、Dr. Nathmal Tatia and Prof. Anantalal Thakur : Madhyānta-vibhāga-bhāṣya (Patna 1967), R. C. Pandeya : Madhyānta-vibhāga-śāstra (Delhi, 1971) などの新しい資料を手に入れることができたので、これらの資料をもとにして、中辺分別論の思想及び他の論書との関係を中心に、初期唯識思想を考察してみた。

中でも中辺分別論真実品第十三偈に説かれている、

「相と分別と名は二〔性〕に摂せられる。
正智と真如（真実）は一〔性〕に摂せられる」

という偈文と、楞伽経に説かれる、

「名と相と分別とは二〔遍計と依他〕の自性の相である。
正智と真如とは円成の相である」（刹那品第六偈）

の偈文とは、両者の所説の上に全く異なるところがなく、（中辺分別論の世親釈と楞伽経の本文との上では相異しているが）、更に楞伽経では三万六千一切法集品第百三十四偈、及び偈頌品の百五十六偈にも同様の偈頌が見出される。

私は昨年、「世親と楞伽経との先後」について論じたが、中辺分別論（偈頌は弥勒といわれる）と楞伽経との先後は未だ学会でも論じられたことはないと思う。（論じた人があったとしても定説はない。）いま、ここに五法と三性との関係について、中辺分別論と楞伽経との偈文がほぼ一致していることは、初期唯識思想を考察する上にまことに興味深い。

また中辺分別論、真実品に、解深密経が引用されていることも注意すべきである。解深密経は瑜伽行派の所依の経典といわれ、また中辺分別論は大乗荘厳経論や法法性分別論などと、思想的に相通ずる論書である。弥勒に帰せられるこれらの論書が（瑜伽論も弥勒の著といわれるが）、解深密経を如何に引用し、楞伽経とどのように関連しているのかは今後の課題であると思う。

（昭和四六年度文部省科学研究費、一般研究Dの成果の一部である。）

註

① 大正大蔵経三十一巻四七七下に「弥勒菩薩説」とある。
② 中辺分別論というのは真諦訳（大正三一、四五一上以下）

であり、弁中辺論（大正三一、四六四中以下）というのは玄奘訳である。Sk. 及び Tib. では「中と辺とを弁別する論」となっている。

③ 山田龍城博士「梵語仏典の諸文献」一二五頁参照。

④ 宇井博士が「弥勒は歴史的人物である」とされて以来、学界では弥勒に年代まで与えているが（例えば中村元博士「インド思想史」一六二頁には約二七〇年—三五〇年とある）、オバーミラー氏の説を紹介しつつ、山口博士は中辺分別論釈疏の序論（二九頁以下参照）において、弥勒の歴史的人物説に疑問をもっておられる。インドにおいて、すでに安慧時代に弥勒信仰があったとすれば（中辺分別論釈疏序三〇頁参照）弥勒の歴史的人物説は再考の余地があろう。

⑤ Dr. Nagao : Madhyāntavibhāga-bhāṣya (1964)

⑥ Dr. Tatia, Prof. Thakur : Madhyānta-vibhāga-bhāṣya (Patna, 1967)

⑦ R. C. Pandeya : Madhyānta-vibhāga-śāstra (Delhi, 1971)

⑧ 最近「東方学」に葉阿月氏の論文「中辺分別論における三性説」（昭和四五年）、「唯識説における空性説の特色」（昭和四七年）などがある。なお「大乗仏典」（世界の名著）には長尾博士の中辺分別論（相品、真実品）の和訳がある。（昭和四二年刊）。

⑨ 山口博士「中辺分別論釈疏」一三頁参照。Nagao 本 p. 17, *l.* 16 参照。

⑩ 山口博士「中辺分別論釈疏」序論四一頁—四二頁参照。

⑪ 漢訳では玄奘訳「於レ彼亦有レ此」、真諦訳「於レ此亦有レ彼」とあつて、彼と此との使い方は異なっているが、それぞれ区別している。なおサンスクリットでは前者は tasyām という f. sg. L. で空性（女性）、後者は sa という m. sg. N. で虚妄分別（男性）なること明らかである。

⑫ 山口博士「弥勒造『法法性分別論』管見」（常盤博士還暦記念仏教論叢）五三五頁参照。

⑬ 安井博士「唯心の二類型」（山口博士還暦記念論集）一九七頁参照。

⑭ 所取能取の二の無については、山口博士「空の世界」一一頁参照。

⑮ チベット訳では、明らかに「中と辺とを弁別する」（dbus daṅ mthaḥ rnam par ḥbyed pa とある。

⑯ Nagao 本、p. 18 *l.* 8 参照。

⑰ 漢訳には玄奘訳、真諦訳ともに「一切法」とある。

⑱ vidhīyate : to be accounted (Tib. bsad pa 説く)

⑲ 山口博士「中辺分別論釈疏」二一頁参照。

⑳ Staël-Holstein : The Kāśyapaparivarta（大宝積経、迦葉品、梵蔵漢、六種合刊）

㉑ その他の異訳では、仏説大迦葉問大宝積正法経巻第二（大正一二、二〇七上）、仏説遺日摩尼宝経（大正一二、一九〇下）、大宝積経（大正一一、六三三下）に相当している。

㉒ sarvaṁ saṁskṛtaṁ câbhūtaparikalpâkhyaṁ | asaṁskṛtaṁ ca śūnyatâkhyaṁ | (Nagao 本 p. 18, *l.* 11)

㉓ Nagao 本 p. 18, *l.* 15 では pratipat | yat…… となっているが、Tatia 本 p. 2, *l.* 8 では pratipad yat…… となっている。pratipad の後に y という軟音がきているから、pratipad でよいと思う。

㉔ 山口博士「中辺分別論釈疏」一二頁参照。Nagao 本、

p. 18. *l*. 21 参照。

㉕ Nagao 本、p. 18. *l*. 23 参照。

㉖ 山口博士「中辺分別論釈疏」二四頁参照。

㉗ Nagao 本、p. 18. *l*. 23 参照。

㉘ Pratibhāsate の省略と思われる。（Nagao 本、p. 18. *l*. 24）

㉙ Nagao 本、p. 18. *l*. 24 参照。

㉚ 山口博士「中辺分別論釈疏」二四頁参照。

㉛ Nagao 本、p. 18. *l*. 25 参照。

㉜ Nagao 本、p. 18. *l*. 26 参照。

㉝ Nagao 本、p. 19. *l*. 1 参照。

㉞ 長尾博士「唯識義の基盤としての三性説」（鈴木学術財団研究年報第四号）一五頁参照。

㉟ 山口博士「中辺分別論釈疏」二六頁参照。

㊱ Nagao 本、p. 20. *l*. 1 参照。

㊲ Nagao 本、p. 20, *l*. 3 参照。

㊳ Nagao 本、p. 20. *l*. 3 参照。

㊴ 野沢本、p. 17. *l*. 8 参照。（山口益還暦記念論文集所収）山口博士の訳に従い、「記識」と訳したが、表識（vijñapti）のことである。

㊵ 山口博士「弥勒造『法法性分別論』管見」（常盤博士還暦記念仏教論叢）五五二頁参照。

㊶ Nagao 本、p. 22. *l*. 23 参照。

㊷ Nagao 本、p. 22. *l*. 24 参照。

㊸ Nagao 本、p. 23. *l*. 1 参照。

㊹ 長尾博士「大乗仏典」（世界の名著）四〇七頁註①参照。

㊺ 山口博士「中辺分別論釈疏」八八頁参照。

㊻ 法法性分別論参照。

㊼ 玄奘訳では、「苦等性の如し」とあるのみであるが、サンスクリット、チベット訳ともに「無常性と苦性の如し」とある。また安慧釈によれば、「無常性は無常より異にあらず、苦性も亦苦より〔異に非る〕如く」とある。（山口博士「中辺分別論釈疏」七五頁参照）

㊽ Nagao 本、p. 23 *l*. 8 参照。

㊾ Nagao 本、p. 23 *l*. 9 参照。

㊿ 例えば Madhyāntavibhāgaṭīkā p. 45. *l*. 15 は Pandeya : Madhyānta-vibhāga-śāstra p. 35. *l*. 30 に相当し、*evam abhūtaparikalpalakṣaṇaṁ* navaprakāraṁ *uktvā yathā śūnyatā jñāyate tat khyāpayatiti* |（p. 45. *l*. 15）は、Pandeya 本では、evam abhūtaparikalpaṁ navaprakāraṁ khyāpayitvā yathā śūnyatā vijñeyā tannirdiśatiti（p. 35. *l*. 30）となっている。

これに相当する Nagao 本は p. 22. *l*. 17 に、Tatia 本では、p. 5. *l*. 13 に説かれている。

なお、こまかな点の同異については、Pandeya の本参照（Y. reconstructs または、Y's reconstruction とある）。

(51) 長尾博士「Madhyānta-vibhāga-bhāṣya」p. 9 参照。

(52) 山口博士「中辺分別論釈疏」序一七頁参照。

(53) Nagao 本、p. 27. *l*. 5～*l*. 9 参照。

Tatia 本、p. 6. *l*. 14～*l*. 18（但し帰敬偈を第一偈として数えているため、この第二十二偈は第二十三偈となっている。）

(54) 山口博士「漢蔵対照弁中辺論」二三頁参照。

(55) 同書 二三頁参照。

(56) 山口博士「中辺分別論釈疏」一〇四頁参照。

㊼ Nagao 本、p. 28. *l.* 8 参照。

㊽ 影印北京版一〇八巻 123—2—3参照。
山口博士「漢蔵対照弁中辺論」二四頁参照。

㊾ 山口博士「漢蔵対照弁中辺論」二四頁参照。

㊿ Nagao 本、p. 28. *l.* 8 参照。

(61) 等分行については、瑜伽論記に「景云等分行者具有貪瞋癡慢尋思等行。不同偏増行者貪等増強」（大正四二、四六一上）とあるように、貪等の煩悩が偏増していないこと、すなわち等分なることをいうようである。また薄塵行については同じく瑜伽論記に「三種独覚皆煩悩軽微名薄塵」（大正四二、四八二下）とあるように、塵（煩悩）が少ないこと、すなわち薄塵である。ちなみに、大乗阿毘達磨集論のチベット訳を見ると、薄塵行に相当する語は「煩悩が少ない」ñon moṅs pa chuṅ pa（影印北京版112巻266—3—1）となっている。

(62) 山口博士「中辺分別論釈疏」一〇七頁参照。
P. Pradhan: Abhidharmasamuccaya of Asaṅga, Santiniketan 1950. p. 86. *l.* 4.
rāgacaritaḥ dveṣacaritaḥ mohacaritaḥ mānacaritaḥ vitarkacaritaḥ samabhāgacaritaḥ mandarajaska caritaś ca
西蔵大蔵経 影印北京版一一二巻 266—2—8参照。

(63) 山口博士「中辺分別論釈疏」一〇七頁参照。

(64) 煩悩障所知障については、山口博士共著「仏教学序説」一九六頁参照。
拙稿「煩悩障所知障と人法二無我」（仏教学セミナー第一号）五二頁参照。

(65) 山口博士「中辺分別論釈疏」一一三頁—一一四頁参照。

(66) 山口博士「漢蔵対照弁中辺論」二八頁参照。

(67) 山口博士「漢蔵対照弁中辺論」二六頁参照。
山口博士「中辺分別論釈疏」序一七頁参照。

(68) Nagao 本、p. 29. *l.* 20 参照。
なお、この偈文が玄奘訳にないことは、山口博士「中辺分別論釈疏」一三三頁参照。

(69) Nagao 本、p. 37. *l.* 18～p. 38. *l.* 2 参照。

(70) Nagao 本、p. 38. *l.* 3 参照。

(71) 註㊹及び本文五五頁参照。

(72) 山口博士「中辺分別論釈疏」一九五頁参照。

(73) Nagao 本、p. 41. *l.* 9 参照。
Tatia 本、p. 21. *l.* 15 参照。
山口本（Madhyāntaviblāgaṭīkā）p. 123. p. 19 参照。
Pandeya 本、p. 94. *l.* 3 及び p. 94. *l.* 14 参照。

(74) 山口博士「漢蔵対照弁中辺論」五二頁二行及び四行目参照。

(75) Nagao 本、p. 41. *l.* 17 参照。

(76) Pandeya 本、p. 95 *l.* 17（但し）p. 96. *l.* 3 では prapatyā となっている。

(77) Tatia 本、p. 22. *l.* 3 参照。

(78) 山口本、p. 125. *l.* 9 参照。

(79) 拙稿「五法と三性について」（印度学仏教学研究第二十一巻第一号三七一頁、於同朋大学、昭和四七年八月二六日発表）参照。

(80) 山口博士「漢蔵対照弁中辺論」五五頁—五六頁参照。

(81) Nagao 本、p. 42. *l.* 21～p. 43. *l.* 1 参照。

(82) 安井博士「入楞伽経の原典研究」（大谷学報第四八巻第二号）一一頁参照。

(83) Nagao 本、p. 42. *l.* 20, p. 43. *l.* 2 参照。

Tatia 本、p. 23. *l.* 5, *l.* 8 参照。

⑧④ 南条博士「梵文入楞伽経」二二九頁参照。
安井博士「入楞伽経の原典研究」（大谷学報第四八巻第二号）一二頁参照。

⑧⑤ 安井博士「入楞伽経の原典研究」（大谷学報第四八巻第二号）一一頁参照。

⑧⑥ 南条博士「梵文入楞伽経」六八頁三行目参照。

⑧⑦ 同書 二八五頁八行目参照。

⑧⑧ Nagao 本は tattvaṁ（p. 43. *l.* 6以下）となっているが、Tatia 本の tattvaṁ（p. 23. *l.* 11）にしたがった。

⑧⑨ Nagao 本、p. 89. *l.* 11 参照。

⑨⓪ 山口博士「中辺分別論釈疏」二一〇頁参照。

⑨① Lévi 本、p. 168. *l.* 3 参照。
宇井博士「大乗荘厳経論研究」五一五頁参照。但し、宇井博士は正行真如の後に清浄真如を並べておられるが、チベット訳、漢訳などからして、やはり邪行真如と正行真如との間に、清浄真如を置くべきであると思う。

⑨② 西蔵大蔵経 影印北京版一〇八巻 110—2—2参照。

⑨③ Nagao 本、p. 43. *l.* 12～p. 43, *l.* 18 参照。
山口博士「漢蔵対照弁中辺論」五七頁参照。

⑨④ 山口博士「中辺分別論釈疏」二一三頁参照。

⑨⑤ 大正三〇、七二五中参照。

⑨⑥ 宇井博士「印度哲学研究第六」二四一頁参照。

⑨⑦ 宇井博士「印度哲学研究第六」一五六頁参照。

⑨⑧ 拙稿「世親と楞伽経との前後論について」（印度学仏教学研究第二十巻第一号）三二一頁参照。

（本学助手・仏教学）